

日本の学習文法で使われる 5 文型について（上）

渡 辺 勉

On the so-called “five sentence patterns” used
in learner’s grammars of English taught in Japan:

part one

Tsutomu WATANABE

Summary

The so-called “five sentence patterns” have been widely used in the teaching of English at junior and senior high schools in Japan. The wide-spread use can be attributed to Hosoe’s (1952) grammar book which owes the large part of its description to Onions (1904). This study has investigated how “five sentence patterns” are described in the educational publications: four self-help books; Hosoe’s grammar book (1971); a recent high school textbook (2013); 18 grammar textbooks for high schools used in 1980s.

The findings of the investigation can be summarized in three points: (1) the publications investigated are divided into two kinds, those dealing with only simple sentences in the demonstration of the “five sentence patterns” and those taking up complex sentences as well; (2) the complement and the object are realized by grammatical items assuming various functions; a complement can be realized by adjectives, nouns, *that*-clauses, *to*-infinitives, gerunds, present participles, past participles and prepositions; (3) the analysis of the structure “object + *to*-infinitive” is controversial; some treat it as part of “SVOC”, others regard it as part of “SVOO”.

The need of developing a new type of “five sentence patterns” is suggested with the idea of verbal valency in mind.

キーワード：学習文法，5 文型，Onions，細江逸記，準教科書

目 次

- 1.1. 初めに
- 1.2. 岩田一男 (2014)
- 1.3. 大津由紀雄 (2004)
- 1.4. フクチ・高橋 (2015)
- 1.5. 宮永國子 (2014)

2. 高等学校の「コミュニケーション英語教科書」(2013)における5文型の記述
3. 「5文型」が日本の英語教育に導入されたきっかけ
 - 3.1. Charles Talbut Onions (1904)
 - 3.2. 細江逸記 (1971)
4. 「学習指導要領」における「5文型」の扱い
 - 4.1. 「英文法準教科書」における5文型の記述の実際
 - 4.2.1. 第1文型 (S+V)
 - 4.2.2. 第2文型 (S+V+C)
 - 4.2.3. 第3文型 (S+V+O)
 - 4.2.4. 第4文型 (S+V+O_i+O_d)
 - 4.2.5. 第5文型 (S+V+O+C)
5. 「7文型」と「8文型」
6. 「5文型」によって何を教えるのか
 - 6.1. 「5文型」を表す数字の意義
 - 6.2. 英語はSVO, 日本語はSOV
7. 結論

1.1. 初めに

日本の中学校、高等学校で英語を学んだことのある人ならば、「5文型」という用語を聞いたことがあると思われる。この用語が日本の人々によく知られていることを確認するために、社会人のための自己啓発書、英語再入門の本を4冊見てみる。

1.2. 岩田一男 (2014)

岩田一男 (2014: 185)⁽¹⁾ は、いわゆる「五つの文型」について次のような例を挙げている。[] 内は筆者による補足である。

- (1) I go. のような「○○は・××する」型 [SV]
- (2) I love you. のような「○○は・××する・△△を」型 [SVO]
- (3) He gives her a ring. のような「○○は・××する・▲▲に△△を」[SVOO]
- (4) I am happy. のような「○○は・●●である」型 [SVC]
- (5) They elected Kennedy president. のような
「○○は・××する・△△を・●●に」型 [SVOC]

川嶋 (2015: 10) によると「5文型」が文部省の中学校学習指導要領で提示されたのが1958年ということなので、岩田 (1961) は新学習指導要領で、当時の中学生たちが「5文型」を学び始めた頃に出版されたことになる⁽²⁾。「旧世代」となった社会人たちに新しい「5文型」の考え方を普及させようという意図があったのであろう。

岩田の提示順は、いわゆる「5文型」を教室で教えるときの提示の仕方ではない。文

型の番号もSVOのような略号も用いていない。注目すべき点は、英語の例文に対するパターン化した訳文が英語の語順で示されている点である。例えば、(3)の「○○は・××する・▲▲に・△△を」は日本語の語順で説明を与えたならば、「○○は・▲▲に・△△を・××する」のようになったはずである。岩田は、さりげなく、英語の語順はSVOだが日本語はSOVということを読者に伝えようとしたのではないか⁽³⁾。

実際、高校生用の参考書を2冊見てみる。若林(1982)と安藤(1989)である。若林(1982: 36)では、〈主語(S)+述語動詞(V)+目的語(O)〉を第3文型と呼ぶと述べて次のような例文を提示している。

- (6) I wrote a poem. (私は詩を書いた)
 S V O

若林は英語の例文と訳文を与えているが、岩田のようなパターン化した訳は与えていないので、表面上は問題がなさそうに見える。安藤(1989: 7)は、まず、次のような例文を与えている。

- (7) Mary enjoys classical music. (メアリーはクラシック音楽を楽しんで聞く)

安藤は、第3文型は「xをyする」と訳すことができると述べて、〈x〉の位置を占めるのが目的語であると説明している。妥当な説明だと思われるが、「xをyする」という日本語のパターン訳を見て、「メアリーはクラシック音楽を楽しんで聞く」という日本語を(8)のように「英訳」する学習者は出てこないだろうか。

- (8) *Mary classical music enjoys.

英語に慣れた学習者にはあり得ないかもしれない。6.2節で後述するが、言語類型論的に言うと、英語はSVO、日本語はSOVである。「メアリーは楽しんで聞くクラシック音楽を」、「私は書いた詩を」のような中間言語を経由して教えた方が日本語母語話者には親切かもしれない。岩田は、さりげなく、英語と日本語の間の高い壁を越える方法を示唆しているのである⁽⁴⁾。

1.3. 大津由紀雄(2004)

大津(2004: 44)は次のような例文を挙げて説明している。[]内の表記は大津の記述に基づき筆者が整理表示した。

- (9) John slept. [I: S+V]
 (10) John is a singer. [II: S+V+C]
 (11) John loves tennis. [III: S+V+O]
 (12) John gave Mary a present. [IV: S+V+O+O]
 (13) John made Mary angry. [V: S+V+O+C]

(9) から (13) の例文について、共通点は [S+V] を含んでいることだと大津は述べている。日本語との対照を考えるならば、日本語とは異なり S (主語) は省略できないとでも指摘しなければ、あまり教育的効果は無いように思われる。

大津 (2004: 45, 46) は 5 文型は万能ではないと述べて次のような例文を挙げている。

- (14) Did you put the decanter on the table, Marilyn?
 (15) By the way, Rufus was lying on the floor.

(14) では on the table を省略すると文が完結せず、(15) では on the floor を省略すると文が成り立たない。5 節で後述するが、Quirk et al. (1985) によれば、それぞれの前置詞句は省略できない副詞的要素 (adjunct) であり、(14) は [S+V+O+A]、(15) は [S+V+A] と分析される。大津は、「7 文型」の話の解説には入らず、辞書の文型の説明を丁寧に読むようにとだけ述べている。紙数の制約があったのだろうが、読者は消化不良になるような気がする。

1.4. フクチ・高橋 (2015)

フクチ・高橋 (2015) はマンガで中学英語を復習させようという社会人向けの本である。p. 207 から p. 210 に「5 文型」のまとめと例文が出ている。各文型ごとに例文を 1 つずつ引用する。文型の分析は例文の下に表示されている。[] 内は筆者による。

- (16) My grandmother gets up early every day. [第 1 文型 S+V]
 S V M M
 (17) That man is my father. [第 2 文型 S+V+C]
 S V C
 (18) Kenta makes his lunch by himself. [第 3 文型 S+V+O]
 S V O M
 (19) I sent her an e-mail yesterday. [第 4 文型 S+V+O₁+O₂]
 S V O₁ O₂ M

(20) I painted the door white. [第 5 文型 S+V+O+C]

S V O C

著者の教育的な配慮が感じられるのは、第 1, 第 3, 第 4 文型の例文に副詞句 (Modifier) を入れた点である。このような副詞類は文法分析的には省略可能である。しかし、フクチ・高橋 (2015: 207) が「S と V だけで構成される英文はあまりなく」と指摘しているのは的確である。確かに (16) から副詞句を削除した “My grandmother gets up.” という文が成り立つ文脈を考えるのは難しそうである。

問題点もある。S+V+O は「S は O を V します」、S+V+O₁+O₂ は「S は O₁ に O₂ を V します」、S+V+O+C は「S は O が C だと V します」というようなパターン化した訳文を与えている点である。1.2 節の後半で指摘した問題である。読者に英語の基本的な語順は SVO であり、日本語の基本的な語順は SOV だという肝心な点が伝わらないかもしれないという不安が残る。「私は彼女に昨日メールを送りました。」という日本語に対して、下の (21) のような英語を発する学習者はいないだろうかという心配である。

(21) *I her an e-mail yesterday sent.

「S は O₁ に O₂ を V します」に英単語を当てはめていくと (21) のような「英文」(?) ができてしまうのである。

1.5. 宮永國子 (2014)

宮永 (2014) は現場の営業マンが英語で書いたプレゼンテーション用の原稿の問題点を指摘しながら、英語と日本語の表現法と発想法の違いを論じている。以下のような「5 文型」のまとめが 81 ページに出ている。

(22) 第 1 文型：主語＋動詞 (S+V)

(23) 第 2 文型：主語＋動詞＋補語 (S+V+C)

(24) 第 3 文型：主語＋動詞＋目的語 (S+V+O)

(25) 第 4 文型：主語＋動詞＋目的語＋目的語 (S+V+O+O)

(26) 第 5 文型：主語＋動詞＋目的語＋補語 (S+V+O+C)

宮永は文型論を展開しているわけではない⁽⁵⁾。「5 文型」に関する読者の予備知識を確認しているだけである。宮永は順番に「5 文型」を論じているわけではないが、それぞれの文型に該当すると思われる例文を引用する。[] 内は筆者による表記である⁽⁶⁾。

- (27) The glass broke. [S+V] (p. 61, p. 74, p. 81, p. 82)
- (28) You broke it. [S+V+O] (p. 61, p. 74, p. 81, p. 82)
- (29) Skies are blue. [S+V+C] (p. 94)
- (30) I gave him some advice. [S+V+O+O]⁽⁷⁾ (p. 92)
- (31) I saw Emily break the glass. [S+V+O+C]⁽⁸⁾ (p. 75)
- (32) The wind blew the door open. [S+V+O+C]⁽⁹⁾ (p. 88)
- (33) A strong wind blew the door closed. [S+V+O+C] (p. 123)

宮永 (2014: 60-62) は例文 (27) と (28) について次のようなエピソードを紹介している。アメリカに留学した女子高校生がホームステイ先で、うっかり、コップを床に落として割ってしまった。そこで、ホストマザーに “The glass broke.” と言うと “The glass did not break. You broke it.” と返されてひどく落ち込んでしまったと言う話である。宮永 (p. 66) は、“You broke it.” という英語が表現していることは、you が原因であり、it は結果であるということだと解説している。アメリカ文化では、you は原因であると指摘しているだけで、決して「あなた (you)」を責めているわけではないということである。

宮永 (p. 73, p. 83, p. 101) は、第 3 文型の役割は主語と目的語を分離することによって、主体と客体を分離することだと主張している。宮永 (p. 87) は第 4 文型と第 5 文型にも第 3 文型が内蔵されていると述べている。6.2 節で後述するが、言語類型論的にとらえるならば、英語は SVO だが日本語は SOV という違いを意識することの重要性を語っていると思う。言語類型論と異なるのは、SVO という構造を英語が持っているおかげで、英語話者は「主語の外にある世界を、目的語として分離したまま認識することができる」と宮永 (p. 73) は述べて、認識論、さらに文明論にまで言及している点である。

2. 高等学校の「コミュニケーション英語教科書」(2013) における 5 文型の記述

第 1 章では、4 冊の社会人向けの自己啓発書を参照して、「5 文型」の話が日本の中学校、高等学校で英語を学んだ人々の基礎知識とされていることが分かった。しかし、岩田 (1961) は中学校で「5 文型」が教えられるようになった頃の出版物であり、50 年以上の時間が経過している。フクチ・高橋 (2015) は新しい本である。想定読者の年齢層は大学生から中高年までと広そうである。しかし、著者の高橋基治氏は責任ある年代の方と思われる⁽¹⁰⁾。中学校、高等学校の教育を受けたのは 20 世紀であろう。

21 世紀になって 17 年目であるが、現在の中学校、高等学校の英語教科書では「5 文型」はどう扱われているだろうか。手元にある 1 冊を参照してみる。高校 1 年生用のコミュニケーション英語の教科書である。霜崎實 他 (2013: 12) には次のような例文と記述がある。[] の記述は霜崎他のものである。

- (34) Birds fly. [1. S+V 「～が…する」]
- (35) I am happy. [2. S+V+C 「～は…である」 など]
- (36) I played tennis. [3. S+V+O 「～を…する」]
- (37) I gave her a present. [4. S+V+O₁+O₂ 「～に…を与える」 など]
- (38) I call him John. [5. S+V+O+C 「～を…と呼ぶ」 など]

[] の数字には「文型」とは書いてないが、この記述順に基づいて教室で「第 1 文型、第 2 文型、第 3 文型、第 4 文型、第 5 文型」という説明を聞く可能性は大いにありそうである。第 1 章で指摘したように、「～を…する」というようなパターン化した日本語訳のせいで日本語と英語との語順の違いが不明確になってしまう危険性があるので指導上の注意が必要である。175 ページから 176 ページには、「5 文型」という用語は出ていないが、この 5 つのパターンについて 28 個の例文と記述が出ている。以下に引用する。「5 文型」による分析の対象になる文は (34) から (38) のような単文に限定されるものではないことを明らかにするためである。また、後の章で過去の教科書の記述との比較を試みるためでもある。[] 内の記述は霜崎他による記述を筆者が挿入したもの、〈 〉内の記述は霜崎他のものである。

- (39) Birds fly. [S+V]
- (40) I am happy. [S+V+C]
- (41) The problem was that her mother tongue, Persian, does not use Chinese characters. [S+V+C] 〈C=that 節〉
- (42) The fact is that the earth looks like an oasis in space.
[S+V+C] 〈C=that 節〉
- (43) The reason for her success is that she enjoys the challenges.
[S+V+C] 〈C=that 節〉
- (44) Ando's hope is that Umi-no-Mori will be a model for the world.
[S+V+C] 〈C=that 節〉
- (45) I kept working in a Japanese company. [S+V+C] 〈C=現在分詞〉
- (46) My two-year-old daughter came running to me. [S+V+C] 〈C=現在分詞〉

- (47) He got caught by the police. [S+V+C] 〈C=過去分詞〉
- (48) Please remain seated at your desk. [S+V+C] 〈C=過去分詞〉
- (49) I played tennis. [S+V+O]
- (50) Everyone wonders when the new park will open. [S+V+O] 〈O=疑問詞節〉
- (51) I don't know if he finished his journey safely. [S+V+O] 〈O=if 節〉
- (52) I gave her a present. [S+V+O₁+O₂]
- (53) The photos will show you what people went through in the 20th century.
[S+V+O₁+O₂] 〈O₂=疑問詞節〉
- (54) The TV program will tell you how he became a famous actor.
[S+V+O₁+O₂] 〈O₂=疑問詞節〉
- (55) She didn't tell her family when she would come back.
[S+V+O₁+O₂] 〈O₂=疑問詞節〉
- (56) The Bible tells us that the world was created in six days.
[S+V+O₁+O₂] 〈O₂=that 節〉
- (57) I call him John. [S+V+O+C]
- (58) He heard his mother sing "Jingle Bells". [S+V+O+C] 〈C=原形不定詞〉
- (59) I saw a lot of people enter the concert hall. [S+V+O+C] 〈C=原形不定詞〉
- (60) The Davidsons did their best to make them feel at home.
[S+V+O+C] 〈C=原形不定詞〉
- (61) The teacher had his students help him with the work.
[S+V+O+C] 〈C=原形不定詞〉
- (62) The teacher let us go home early. [S+V+O+C] 〈C=原形不定詞〉
- (63) I often saw them sleeping on the streets. [S+V+O+C] 〈C=現在分詞〉
- (64) We heard somebody playing the piano in the music room.
[S+V+O+C] 〈C=現在分詞〉
- (65) They wanted the wall painted white. [S+V+O+C] 〈C=過去分詞〉
- (66) He found himself left alone in the forest. [S+V+O+C] 〈C=過去分詞〉

いくつか記述の特徴がある。S+V については上記の (34) しか取り上げていない。修飾語 (Modifier) が続いて S+V+M になるケースは、すくなくとも文法のまとめには出ていない。いわゆる第4文型の記述は、[S+V+O₁+O₂] となっていて、間接目的語、直接目的語という用語を使っていない。[S+V+O+C] に関する例文 (57) から (66) では、文型そのものだけでなく、例えば (63) で例示されている「see+目的語+～ing」のような語と語の繋がり (collocation) を同時に教えようという意図がある

と思われる。

次の 2 つの例文は分析に異論が出るかもしれない。

(67) I kept working in a Japanese Company. [S+V+C <=現在分詞>]

(68) My two-year-old daughter came running to me. [S+V+C <=現在分詞>]

Keep に続く～ing 形は江川（1964: 299）、『ルミナス英和辞典』（2005: 942）では補語（C）と分類されている。『ジーニアス英和辞典』（2014: 1164）では C と明示されていない。しかし、辞書の表記の約束に従って、[SV (on) doing] という表記は [SVC] と解釈して差し支えないであろう。Keep に続く～ing 形は、日本の学習文法では [SVC] と分析されてきたわけである。

Come に続く～ing 形は江川（1964: 299）、『ウィズダム英和辞典』（2013: 372）では補語と明記されている。『ルミナス英和辞典』（2005: 324）では「現在分詞とともに」と表記され、補語とは書いていない。『ジーニアス英和辞典』（2014: 415）では [SV doing] と表記されているが、前後の記述から、この～ing を C と解釈するのは難しそうである⁽¹¹⁾。

教室の現場では、江川（1964: 191）の「われわれとしては意味が理解できればいいのであって、補語と認めるか否かは文法家の問題である」という主張に耳を傾けておおらかな姿勢で授業を展開する配慮が必要である。

3. 「5 文型」が日本の英語教育に導入されたきっかけ

第 1 章と第 2 章で「5 文型」が世代を超えた日本人の共有財産とも言えるくらいに浸透していることが分かった。第 3 章では「5 文型」が日本の英語教育に導入された経緯について考察する。

3.1. Charles Talbut Onions (1904)

小泉（2009）はフランスの Tesnière の結合価文法を日本語と英語の分析に応用した理論書である。小泉は 191 ページで受験英語の参考書として、江川（1964）と綿貫 他（2000）に言及し、記述分析の根底は C. T. Onions にあると述べている。小泉の意図は日本ではあまり知られていない Tesnière の理論を紹介することにある。興味深いことに、小泉は Tesnière の結合価文法は、Onions の 5 文型による分析と Hornby の 25 の動詞形による分析と両立すると示唆している点である⁽¹²⁾。一般言語学の研究者が英語の統語論について語るときにも「5 文型」に言及するのである。日本の英語教育に与え

た影響がいかに大きいかが分かる。

さて、Onions が日本の学校文法で教授されてきた「5 文型」の成立に与えた影響については諸説あるようである。日本の英語学者たちの言説を参照してみる。安藤（1969: 18）は C. T. Onions（1932）*An Advanced English Syntax* の訳書の中で「これが、わが国の学校文法で一般に踏襲されている 5 文型の原型である」と述べている。小西（1967: 95）は「Onions が元祖であるかどうかはわからないが、かれのこの著によって急速に普及したことは否定できない」と述べている。安井（1973: 175）は「わが国における「5 文型」という用語の確立は、「5」という数字はアニアンズから借り、「文型」の部分はパーマーやホーンビーから借りることにより作られた」と述べている。

3 人の英語学者たちは、Onions が出発点であったことを否定していない。しかし、Onions（1911: 6-9）に出ている「First / Second / Third / Fourth / Fifth Form of Predicate」と Hornby（1954: 16）に出ている 25 個の動詞型（verb patterns）を結びつけて議論することは言語理論的には妥当であるかもしれないが⁽¹³⁾、英語教育史的な観点から振り返ると、Onions と Hornby がいきなり結びついたわけではなさそうである。

川嶋（2014a: 50）は大塚（1968）に言及しながら、「5 文型」が日本の英語教育界で支持されるようになったのは細江の影響であり、もちろん、細江の第一公式から第五公式は Onions の the First Form of Predicate から the Fifth Form of Predicate を原型にしていると述べている⁽¹⁴⁾。

以下、3.2 節では Onions の考え方の普及に影響を与えたと思われる細江逸記による記述を紹介する。伝聞にもとづいた孫引きをする危険を避けて原典にどのようなことが書かれていたかを知るためである。

3.2. 細江逸記（1971）⁽¹⁵⁾

いわゆる「5 文型」の元となったと考えられる細江の考案による文の 5 つの形式を参照する。語句を（ ）で囲んであるのは細江の表記である。（ ）で示す例文の番号と [] 内の表記は筆者による。

表 1 第 1 形式の文（細江 1971: 26）[S+V]

主部	述部
(69) Dogs	bark.
(70) Stars	twinkle.
(71) (His) father	died (yesterday).
(72) (The) man	spoke (at last)
(73) Someone (else)	must go (there)

細江（1971: 25）は第 1 形式の文では、「その述部はその動詞以外になんらの語の添

加を必要としない」と主張している。しかし、例文 (71), (72), (73) では述部に副詞句が含まれている。文法的には省略可能であるのかもしれないが、副詞句がある方が普通の英語という感じがするのであろう。細江が第 1 形式の文から副詞句を徹底的に削除しようとしたわけではないということが分かって興味深い。学習文法で [S+V] を教授するときに副詞句をどう扱うかを考えるときの参考になる。

表 2 第 2 形式の文 (細江 1971: 27) [S+V+C]

主部	述部	
	述語	補語
(74) It	was	he.
(75) James	has become	(a) (famous) soldier.
(76) Mary	turned	(very) pale.
(77) (The) man	went (away)	dejected.
(78) This	seems	of importance.

例文 (77) と (78) は日本の学習文法、特に、中学校、高等学校の教室では [S+V+C] の例文としては出てこないような気がする。Onions (1911: 6) の Second Form of the Predicate の例文には出ていない。細江 (1971: 27) は例文 (77) について、「The man went away だけでも場合によっては完全な文であり得るのであるが…この場合における went は不完全陳述の自動詞となり、いわゆる補語 dejected が添わって初めてその陳述が完成する。」と主張している。しかし、dejected⁽¹⁶⁾ は学習文法では、動詞が要求する不可欠な要素として扱うのではなく、修飾語として扱う方が無理がないように思われる。例えば、分詞構文である。現在の英和辞典での go の記述を見してみる。

(79) The difference went deep. [ジーニアス英和辞典 2014: 910]

(80) He had to go hungry. [ルミナス英和辞典 2005: 732]

(81) The milk went sour. [ジーニアス英和辞典 2014: 911]

『ジーニアス英和辞典』は例文 (79) を [SV 副詞句] と分析している。辞書の説明によると第 1 文型ということになる。went は完全自動詞の用法ということになる。細江の “The man went away dejected” の用法に一番距離が近いように思われるが、細江の「第 2 形式の文の中の補語」という分析とは異なる。

例文 (80) と (81) は『ルミナス英和辞典』と『ジーニアス英和辞典』で、それぞれ、[S+V+C] と分析されている。go は不完全自動詞として使われている⁽¹⁷⁾。

細江の例文 (78) の of importance は important と言い換えれば形容詞となり補語 (C) と扱うことが可能になる。しかし、of の文中での役割を説明できない。前置詞 of

の用法を『ルミナス英和辞典』（2005: 1204），『ジーニアス英和辞典』（2014: 1463），江川（1991: 7）で見ると、全て、of importance を important と言い換えている。もちろん、文型の分析はない。21 世紀になっても of importance は例外と扱うほかなさそうである⁽¹⁸⁾。

表 3 第 3 形式の文（細江 1971: 29）[S+V+O]

主部	述部	
	述語	目的
(82) Cats	catch	mice.
(83) (The) queen	recognized	(the) ambassador.
(84) Children	should obey	(their) parents.
(85) (Many) hands	make	(light) work.
(86) (My) brother	is studying	(the) history (of China).

第 3 形式の文の例文については、object の訳語を「目的語」ではなく、「目的」としている以外は、現在の学習文法と大きな差異はないように思われる。

表 4 第 4 形式の文（細江 1971: 32）[S+V+O+O]

主部	述部		
	述語	間接目的	直接目的
(87) I	gave	him	(a) book.
(88) (His) brother	has sent	her	this.
(89) (The) (old) man	will tell	us	(a) (funny) story.
(90) (My) father	has bought	me	(a) (new) house.
(91) (That) lady	showed	(the) officer	(her) passport.
(92) He	saked ⁽¹⁹⁾ (ママ)	(the) boy	(a) question.

第 4 形式の文の例文については、indirect object の訳語を「間接目的語」ではなく、「間接目的」とし、direct object の訳語を「直接目的語」ではなく、「直接目的」としている以外は、現在の学習文法と大きな差異はないように思われる。

表 5 第 5 形式の文（細江 1971: 36）[S+V+O+C]

主部	述部		
	述語	目的	目的補語
(93) Father	made	me	(a) merchant.
(94) People	call	him	Long John.
(95) They	elected	Mr. Wilson	President.
(96) (The) court	declared	him	guilty.
(97) Misfortune	drove	(my) father	mad.
(98) They	thought	it	him ⁽²⁰⁾ .

現在の学習文法との用語の違いは、「目的語」を「目的」と言い、「目的格補語」を「目的補語」と呼んでいる点である。

川嶋 (2014a: 37-40) によれば細江が Onions (1904) に対して加えた改善点が 2 つある。

1 つめの改善点は、自動詞と他動詞の区別を導入したことである。川嶋は英語的な発想では他動詞 (transitive verb) が無標であり、自動詞 (intransitive verb) は有標だと指摘している。Hornby の verb patterns の記述の順序をみると面白いことが分かる。Hornby (1954: 16-58) の verb patterns 1-19 では他動詞が記述され、Hornby (1954: 58-82) の verb patterns 20-25 では自動詞が記述されている。

ところが Hornby は第 2 版で記述の順序を変えている。Hornby (1975: 14-38) の verb patterns 1-5 では自動詞が記述され、Hornby (1975: 38-77) の verb patterns 6-25 では他動詞が記述されている。さらに他動詞は 2 つのグループに大別されている。Verb pattern 6-10 が単純他動詞であり verb patterns 11-25 は他動詞だが、さらに補語 (complement) または間接目的語 (indirect object) を必要とすると Hornby (1975: 48) は述べている。Hornby (1975) の記述の方が現在の日本の学習英文法で馴染みがあるものである。

日本の代表的な学習英文法書である江川 (1964: 180), 江川 (1991: 185) とともに自動詞から記述を始めている。綿貫 (2000: 376) も自動詞から説明を始めている。この日本式の記述の順を定めたのは細江であると川嶋は述べている。細江 (1971: 25) は、英語の動詞は自動詞と他動詞に 2 大別され、自動詞は完全陳述自動詞と不完全陳述自動詞とに下位区分され、他動詞は単純他動詞、付与動詞、作為動詞に下位区分されると述べている。

2 つめの改善点は、Nesfield (1889) を参考にして「不完全な叙述の動詞を完全なものにする」complement という概念を導入し、その訳語を「補語」と定めたことだと川嶋 (2014 a: 39) は指摘している。確かに川嶋の指摘するとおり、Onions (1911: 6, 9) の second form of the predicate と fifth form of the predicate の記述では、subject, verb, object という用語は使われているが、現在の complement という用語は使われていない。該当部分は “predicate adjective or predicate noun or predicate pronoun” となっている。上位概念 (cover term) の導入を図ったのは細江の英断である。ただし、現在の学習英文法の用語と異なる点もある。細江 (1971: 27, 36) は subjective complement を「主格補語」ではなく「主補語」と呼び、objective complement を「目的格補語」ではなく「目的補語」と言っている⁽²¹⁾。

「補語」で示される範囲は現在よりも広いように思われる。細江 (1971: 141) は次のような例文を取り上げている。

(99) He nodded asleep⁽²²⁾.

細江は asleep を主補語 と分析している。現在の学習文法で [S+V+C] を教える場合は、動詞 (V) は連結動詞 (copulative verb) に限定されると思われる。例文 (77) で指摘した問題点と共通である。

4. 「学習指導要領」における「5 文型」の扱い

1.2 節で見たとおり、いわゆる「5 文型」が文部省の「中学校学習指導要領」で、最初に提示されたのは 1958 年である。2009 年 3 月に発表された現行の「高等学校学習指導要領」では、「5 文型」という用語は使われていないが、指導すべき文の構造は「5 文型」に基づいて整理されていると川嶋 (2015: 5-13) は指摘している。

1958 年発表⁽²³⁾ の「中学校学習指導要領」を参照してみると、「主語＋動詞の文型」、「主語＋動詞＋補語の文型」、「主語＋動詞＋目的語の文型」、「主語＋動詞＋間接目的語＋直接目的語の文型」、「主語＋動詞＋目的語＋補語の文型」という記述がある。確かに「文型」という言葉は使われているが「5 文型」の「5」という数字は見当たらない。1969 年発表⁽²⁴⁾、1977 年発表⁽²⁵⁾、1989 年発表⁽²⁶⁾、1998 年発表⁽²⁷⁾ の「中学校学習指導要領」には 1958 年発表のものと同様の記述がある。2006 年発表の「中学校学習指導要領解説」⁽²⁸⁾ では、38 ページで「文法事項」については、従来の学習指導要領で用いられていた「文型」に替えて「文構造」という用語を用いた。文を「文型」という型によって分類するような指導に陥らないように配慮し、また、文の構造自体に目を向けることを意図してより広い意味としての「文構造」を用いたものである。」という指導上の助言が書かれている。しかし、その後の「文構造」の例示のためには、「主語＋動詞」、「主語＋動詞＋補語」、「主語＋動詞＋目的語」、「主語＋動詞＋間接目的語＋直接目的語」、「主語＋動詞＋目的語＋補語」という用語を使っている。ただし、これは指導すべき英文の種類を教師のために「文法用語」を使って説明しているだけであって、生徒に教えるということではないだろうと思われる。1958 年以来、「文型」という概念を生徒に教えるということではなかったのではないかと筆者は考える。

謝辞

この研究は 2016 年度に拓殖大学人文科学研究所から個人研究助成を受けた。関係者の皆様に心から感謝申しあげる。本稿は拓殖大学人文科学研究所の許可を受けて、前半部 (上) が第 39 号に、後半部 (下) が第 40 号に掲載される。なお、参考文献は (下) にまとめて掲載される。

《注》

- (1) 初版は 1961 年発行。原著は岩田一男 (1965) 『英語に強くなる本 教室では学べない秘法の公開』改訂新版 光文社カッパ・ブックス。ここで参照しているの筑摩文庫による復刊本である。筑摩文庫のホームページは次のように述べている (<http://www.chikuma>

shobo.co.jp/product/9784480431813/ アクセス日: 2017 年 9 月 2 日)。「1961 年の発売時
わずか 3 カ月で 100 万部を突破した昭和を代表するベストセラー。日本人が陥りがちな暗記
や直訳など小手先のテクニックにとらわれることなく、英語という言語の本質に迫りながら
多彩な例文を多数用いて、わかりやすく、ユーモアたっぷりに英語を学ぶことができます。
50 年以上も前に書かれながら今なお新鮮な発見を与えてくれる一冊」。

- (2) 学習指導要領で「5 文型」が明記されていた時代の学習参考書として、小川義勇・安田一
郎 (1961) 『英語の文型と運用』, 安田一郎 (1970) 『NHK 続基礎英語 英語の文型と文
法』がある。どちらもパターンプラクティスの考え方に基づいて作られた本である。平叙文
を疑問文に変える, 肯定文を否定文に変える, 平叙文から特殊疑問文を作るなどの練習を通
じて学習者に英語の語順を学ばせようという意図である。どちらの本も「5 文型」による分
析を各課に与えている。もちろん「文型番号」ではなく, S, V, O, C の略号を用いた表記
である。「5 文型」による説明は背景説明になっているようである。直接, 「5 文型」の分析
を求める練習問題は少ない。小川・安田 (1961) には 86 課のレッスンがあり, 練習問題
(practice) の大問数は 201 問である。201 問の中で「5 文型」に関する知識を前提とした練
習問題は p. 47, p. 83, p. 85, p. 89, p. 105, p. 110, p. 117, p. 120, p. 152 と 9 問ある。総大問
数に占める割合は, 4.48% である。直接, 「5 文型」の分析を求めているものは, p. 47 の
「次の文が (a) S+V か (b) S+V+C かを区別しなさい」, p. 89 の「次の文の中, S+V+
O+C の文型に属するものを選びなさい」, p. 110 の「次の文の意味と文型を考えなさい」,
p. 120 の「次の文の意味と文型をいいなさい」, p. 152 の「次にそれぞれの文を S, V, O, C
に分けなさい」の 5 問だけである。あとは, 例えば, p. 85 で「次の文の直接目的語を主語
として第Ⅲ文型の受動態をつくりなさい」と指示した後で, 「He gave me a book.→A book
was given to me by him.」のような例示があるので, 文型の分析にこだわらなくても解け
る問題である。安田 (1970) には 60 課のレッスンがある。練習問題の大問数は 114 題であ
る。114 題の中で「5 文型」に関する知識を前提とした練習問題は p. 53, p. 61, p. 125, p. 129
と 4 問ある。総大問数に占める割合は, 3.51% である。直接, 文型の分析を求めているもの
は, p. 125 の「[S+V+O+C] の文型に属しているものを選び」と p. 129 の「[S+V+O+
C] の文型に属しているものを選びなさい」の 2 問である。
- (3) 日本語と英語の語順の違いに気づく子供の学習者もいる。種田 (1973: 20) は, 1950 年頃,
小学校 5 年生の時の体験を次のように語っている。『私は行く学校へ毎日』そこでまた一大
発見をした。日本語の単語をこのようにならべておき, 単語を一つ一つ英語におきかえると,
しかるべき英語になるではないか, と! そこで, この奇妙な語順の日本語になれようと, い
ま考えると, まことにいじらしい努力をなん度も重ねたものである。『ジャックは, です,
もっと背が高い, よりも, ベティ』式に」。
- (4) 江川 (2014: 92, 93) は第 4 文型と第 5 文型の例文を次のように紹介している。
- (a) I gave him a book.
 (私は) (与えた) (彼に) (本を)
- (b) We call her Betty.
 (私たちは) (呼ぶ) (彼女を) (ベティと)
- 江川の本の初版は 1956 年に出ている。文部省が学習指導要領に「5 文型」を取り入れる 2
年前である。
- (5) 宮永 (2014: 212) は宮脇政孝 (2012) 「5 文型の源流をさかのぼる: C. T. Onions, An
Advanced English Syntax (1904) を超えて」に言及している。
- (6) 宮永 (2014) は, 第 1 文型, 第 2 文型, 第 3 文型, 第 4 文型, 第 5 文型という表現をして
いる。主語, 目的語という用語も使っている。しかし, S, V, O, C という略号は使ってい
ない。

- (7) 宮永 (2014: 92) は例文 (30) を第 4 文型と呼んでいるので、[S+V+O+O] と分析できる。ところが、宮永 (2014: 90) は、“She named her cat Sally.” を「第 4 文型」と記述している。前後の文章からして誤植ではないと思われる。おそらく、宮永が繰り返し主張する「パラフレーズ」によって “She gave her cat the name Sally” と言い換えた上で、「第 4 文型」としたのであろう。いわゆる「5 文型論」ならば、[S+V+O+C] と分析するのが普通であろう。
- (8) 宮永は例文 (31) について何文型とも言っていない。[S+V+O+C] は筆者の分析である。
- (9) 宮永は例文 (31) と (32) を第 5 文型と呼んでいるので、[S+V+O+C] の分析を与えた。日本の学習文法で [S+V+O+C] の例として出てくる動詞としては blow は珍しいように筆者には思えたので、英和辞典を引いてみた。『ルミナス英和辞典』(2005: 179) は “The wind blew the door shut” に [S+V+O+C] の記述を与えている。『ジーニアス英和辞典 第 5 版』(2015: 232) は “I blew my pipe clear” に [S+V+O+C] の記述を与えている。この blow の使い方は Goldberg (1995) が結果構文 (resultative construction) と呼んだ用法と思われる。鈴木亨 (2013: 110) は次のような例文を挙げている。 “He blew the napkin off the table.”
- (10) 東洋英和女学院大学ホームページ (https://passport.toyoeiwa.ac.jp/kg/japanese/researchersHtml/02019/02019_Researcher.html アクセス日: 2017 年 9 月 17 日)
- (11) 日本の学習英和辞典の文型、動詞型表記の大元になったと考えられる Hornby (1974) を参照すると興味深いことが分かる。なお、初版は 1948 年に、第 2 版は 1963 年に出版されている。Keep~ing には 463 ページで [VP2E] という表示を与えている。Come~ing にも 165 ページで同じ表示を与えている。つまり、[S+vi+present participle] ということであり、~ing は現在分詞という品詞が表示されているが、文中での文法的な役割については言及がない。Keep も come も同じように扱われていたわけである。Hornby の英英辞典の初版は 1948 年に出版されている。日本で「5 文型」の考え方が中学校、高等学校に導入されたころは、まだ、分析にそれほど厳密性を求めていなかったのかもしれない。
- (12) 筆者も Hornby の動詞形の分析は結合価文法 (valency grammar) ないし依存文法 (dependency grammar) へと発展させられると考えている。いずれ別の機会に論じたい。Tesnière ではなく、イギリスの Richard Hudson の依存文法理論で英語を分析した例としては拙稿 (2004) がある。
- (13) 小泉 (2007: 238-239) は Onions の「5 文型」Hornby の 25 の「動詞型」を次のように対応させている。() 内の数字は Hornby の動詞型の番号である。(1) SV (20, 21, 23, 24, 25), (2) SVC (22), (3) SVO (1, 2, 3, 10, 11, 15, 17, 18, 19), (4) SVOO (12, 13, 14, 16, 19), (5) SVOC (4, 5, 6, 7, 8, 9)。SVO の 19 と SVOO の 13 は誤植であると思われる。安井 (1973: 187) は Hornby の VP13 を SVO と分類している。小泉の SVO の 3 は Hornby の “I do not want anyone to know.” という例文であると思われる。Jespersen 流に “want anyone to know.” 全体をネクサス目的語と分析するならば SVO という分析は成り立つだろう。Onions (1911: 128) では、“Report declared him to be dead.” において “him to be dead” の部分を不定詞付き対格 (accusative with infinitive) と呼び、“him” と “to be dead” は分離不可能と述べている。後述するように Onions は補語 (complement) という概念を使っていない。Onions (1911: 9) に出ている “Fifth Form of the Predicate” は “Subject+Verb+Object+Predicate Adjective or Predicate Noun” なのである。小西 (1967: 103) が言うように不定詞は副詞的付加詞ということになる。
- (14) 川嶋 (2014c: 22) はイギリスにおける 5 文型の祖型は Onions の師である Sonnenschein が編集した Parallel Grammar Series の中にあると述べている。さらに、日本では宮脇 (2012) が出版されるまであまり知られていなかったと指摘している。

- (15) 川嶋 (2014a: 50) によれば, 細江 (1952)『英文法汎論』改訂第 15 版を参照すべきようである。著者が入手できた版が 1971 年版なので, 以下の議論はこの版に基づいて進める。
- (16) Oxford Sentence Dictionary の中の accept の用例として次のような例文が出ている。
 “He hated how she made him think she accepted him, and then crushed all his hopes and smiled triumphantly as he walked away dejected.” 下線は筆者による。このような dejected の使い方は現在もあることが分かる。
- (17) 江川 (1964: 191-192) は「まぎらわしい補語」の例について説明している。(a) He came home discouraged. のような例について, 「この種の語法については…われわれとしては意味が理解できればいいのであって, 補語と認めるか否かは文法家の問題である」と述べている。Jespersen (1949 part III: 358) に言及しているので参照する。Jespersen は “quasi-predicatives” という概念について論じている中で次のような例文を挙げている。(b) We parted the best of friends = We were the best of friends when we parted. Jespersen は意味を重視して言い換えて説明している。言い換えの一部の “We were the best of friends” を「5 文型」で分析すれば SVC となる。
- (18) “of importance” という表現が現代英語に存在しないわけではない。BNC Online で “seems of importance” を検索するとヒット件数はゼロである。“seems” との相性は悪いかもしれない。“seems important” を検索するとヒット数は 100 万語中 18 件であるが, “is important” を検索すると 4,676 件もヒットする。“is of importance” を検索するとヒット数は 37 件である。例えば次のような例文がある。“This whole question is of importance not only because it was so central to Engels’s book but also because The Origin has rightly been considered a major contribution to the feminist tradition.” (http://scnweb.jkn21.com/bsearch/login3.cgi?jkxsid=_viI08DnM6XRfADObVZrrdmSt86LySMn1TJA20iUA2o&success_param= アクセス日: 2017 年 9 月 17 日)
- (19) asked の誤植であろう。細江 (1971: 34) に “He asked a question of the boy.” という言い換えが出ている。
- (20) 例文 (95) が実際に使われるか不安がある。BNC Online で検索するとヒット件数はゼロである。例文 (95) に近い用法としてはジーニアス英和 (2014: 2169) に “She thinks herself pretty.” という例がある。目的語と目的格補語の双方が代名詞ということに無理があるように思われる。BNC Online で thought it difficult で検索すると次のような 1 例が見つかった。“notwithstanding some writers have thought it difficult & equo” (<http://scnweb.jkn21.com/BNC2/> アクセス日: 2017 年 10 月 1 日)
- (21) 日本の代表的な学習文法書を参照してみる。Objective complement を綿貫 (2000: 30-31) と江川 (1964: 181; 1991: 192) は「目的格補語」と呼んでいる。安井 (1996: 24) は細江と同じ「目的補語」を使っている。
- (22) 『ルミナス英和辞典』(2005) にも『ジーニアス英和辞典』(2014) にも nod の後に asleep のような形容詞が来る例は出ていない。BNC Online で検索しても “nodded asleep” のヒット件数はゼロである。
- (23) <https://www.nier.go.jp/guideline/s33j/chap2-9.htm>
- (24) <https://www.nier.go.jp/guideline/s44j/chap2-9.htm>
- (25) <https://www.nier.go.jp/guideline/s52j/chap2-9.htm>
- (26) <https://www.nier.go.jp/guideline/h01j/chap2-9.htm>
- (27) <https://www.nier.go.jp/guideline/h10j/index.htm>
- (28) <http://www.yamagata-c.ed.jp/kyouka/eigo/New%20Room/newcourse.pdf>